金光教土佐高岡二代教会長　野村頴璋大人の生涯

（▲故野村頴璋美志道次秀貫歩大人之霊神【遺影】）

金光教土佐高岡教会蔵書

（▲野村頴璋師）

金光教土佐高岡二代教会長
野村頴璋大人の生涯

著者　野村清治

○目次

・刊行の言葉
・川田家にて出生より金光教に出会うまで
・信者より教師になられるまで
・土佐高岡教会の生活でのこと
・子供が産まれる中に
・教会長となられてからのこと
・子供の成長と病気を通じての教師の育成
・病の治療と体の不自由さの中で
・最期に向けての御修行
・御葬儀のこと
・霊の神となられてからも
・故野村頴璋大人遺稿集（再掲）
・あとがき
・野村頴璋大人　略歴

刊行の言葉

本年は土佐高岡教会の布教七十年の記念年でもありますが、父であり二代教会長の野村頴璋師が亡くなられて五年を迎えさせて頂きました。

二代の生涯とさせて頂きましたが、幼少のことは余り詳しくは分かりません。

また事柄によっては省かせて頂いております。故人が書き残されたものや、聞き覚えているところ、人より聞かされた内容から、察して書かせて頂いている状態でありますので、誤っている箇所もあるかも知れませんが、

ご容赦を頂けますよう、御霊神様にもお詫びを申し上げ、書かせて頂きます。

ご覧頂く方々にも、ご了承下さいますよう、お願い申し上げます。

二〇一六年（平成二十八年）九月二十三日

野村　清治

・川田家にて出生より金光教に出会うまで

野村顕璋（ひであき）師は、昭和十五年十一月十六日に高知県東津野村宮谷にて、御父、川田玉義氏、御母吉恵氏の二男五女の姉弟で、末の子の二男として産まれられました。

川田家は田舎であっても、田畑山林を持った農家であり、家屋敷は吉村虎太郎の生家を顕璋師の曽祖父である川田重作氏が明治二十八年に買い受け、大勢の地元の方を雇い移築された物で、顕璋師が二十一歳の時までは生活させて頂いていて、家の梁なども大きく立派な物だったとも聞いております。

また山の中での暮らしには大変な苦労も多いが、農家として田畑や茶畑で作物を作り、子供の頃は庭に鶏や山羊なども食料として飼っており、時には山での狩猟もされるようなところで生活をされておられました。

顕璋師は末の子として姉弟の中でも長女とは十七歳差があり、親子ほど年が離れているため可愛がられもしたが、当時のこと父親から働き者になるよう厳しくも育てられ、朝早くから家の仕事を手伝うため、食事の時もゆっくり食べる事もできず、そのため食事なども掻き込むように早食いでもあられました。

また学校に通うようになると、今時と違い冬には山道で腰元まで降るような雪を掻き分け、山の上から里の学校に通うなど、春になればイタドリやワラビ、ゼンマイなど山菜を採り、谷川

などでも遊んでいたらしいが、短気な性格で、近くの竹で作った竿で釣りをしていた時にでも、魚が食わんと思ったら竿をへし折って帰るような、気性の荒いところもあられた。

ただ戦前、戦中、戦後の混乱期も、田舎の農家ゆえか、戦渦に巻き込まれることもなく、食べる物にも困らずに過ごすことが出来たのは、有り難いことであられた。

そうした親の慈しみの中で、元気に過ごされていたが、父親の玉義氏は顕璋師が中学の頃という早くに亡くなられ、家の跡継ぎは長男の川田温聖(はるまさ)氏がされたので、二男である顕璋師は昭和三十一年三月に高知県東津野中学校を卒業すると、同年の六月より大阪府大阪市阿倍野区王子町にある中本工業株式会社に働きに出るも、翌年の一月には高知県の地元に帰り、二月から須崎市にある野中理容所の見習生として、努力するも、アレルギーにて使用する薬品が肌に合わずに二年二ヶ月で辞められ、昭和三十四年七月より改めて大阪に行くと中本工業株式会社に再就職し、あたかもその昭和三十四年は金光教本部の立教百年の記念の年でもあり、先年より里の姉の松阪歌子(うたこ)氏が金光教須崎教会に入信されたこともあって、須崎教会からは姉のお手引きにより母と兄弟は須崎教会から御本部参拝させて頂くことになり、顕璋師も大阪の阿倍野教会の団体列車で御本部参拝をさせて頂くことになったのが、金光教にお引き寄せを蒙られた最初であります。

ただその後、大阪では次第に体調が悪くなり始め仕事も長続きせず、昭和三十五年の九月まで働くも、東津野村の地元に帰り少し体調も良くなったので、地元の新田にある神戸屋洋服店の見習いとして、十月より働き始めるも、昭和三十五年、顕璋師は二十歳の時に血尿が出られるほどの重き腎臓病に罹り、医師からは余命半年と告げられ、

姉の松阪歌子氏より、金光教の信心をさせて頂かんかと導かれ、顕璋師も何とか助かりたい一心もあり、信心させて頂こうとこの御道に御神縁を蒙り、昭和三十六年四月十日に信者として働きながらの須崎教会への参拝、御取次を頂かれる信心生活が始まったのであります。

・信者より教師になられるまで

須崎教会では先の須崎教会長竹内鶴松（つるまつ）師が御用されておられたので、御取次を受けられようと姉と共に朝は三時過ぎに起きて、四時からの朝の御祈念参拝をさせて頂いて、竹内鶴松師より、「金光教は毒断ちの道である、何でも好きなものを頂いておかげを受けなさい。」との御教えを頂き、母と姉は私がまだ若い時で、お肉が好きでしたので、「それならどうせ半年の命なら好きなお肉を食べさせて、死んで悔いのないように。」とその晩にすき焼きをして食べさしてくれたのであります。

すると翌朝になり、起きてトイレに行き出させて頂いた小便を見ると血の小便どころか、澄み切った小便に驚き、それを機に腎臓病は全快の神みかげを蒙り、医師も不思議だと首を傾げられ、余命半年と告げられた亡き命も継いで頂き、顕璋師も、金光教の信心の有り難さを感じ信心を続けられたのでありました。

ただ冬の時など、当時の須崎教会は建て付けの悪い障子の隙間から雪が吹き込んで積もるような状態で、当時は月次祭でしたが、祭典の後に話しを聞かせて頂くのは寒いは、正座している足は痺れるはと大変であり、それも話が終わろうとして鶴松師は御神前に向かっていても、これも言い忘れていたと思い出したように説教台に戻り、さらに小一時間は話を続けられるのは、正直、有り難さよりも辛か

ったと話しておられたこともありました。

その当時はまだ金光教の信心はさせて頂いておりましたが、金光教教師になるつもりもない時代でしたので、信者の立場としての思いなども、金光教教師になられてからも時には話してくれておりました。

そんな時に竹内鶴松師が御本部に御礼参拝をされる事を聞かれると、今まで色々な仕事をさせて頂いてきたが、今後、どのような仕事をさせて頂いたらいいかを伺ってもらいたいと、何気なしに頼まれるのを鶴松師は受けて下さり、御本部に参られ三代金光攝胤（せつたね）様の御取次を賜る中に、「お道の教師にならせて頂ければ立ち行きましょう。」とのお言葉を賜りましたが、頴璋師は思いもかけないお言葉に「なんぼ親先生、三代金光様が申された言うても、私に金光様の教師が勤まるようには思えません。」と素直に受けることが出来ず心が揺れ動き、金光教の教師にならないと言うと、また血尿が出るようになり、悩みながらも金光教の教師になりますと申せば、澄み切った小便になるという具合に、神様から「どうするなら」と追い詰められ試されるような中で、最後には心を固め、強い決意を持って金光教の教師にならせて頂くために、昭和三十六年十一月に仕事を辞められて、須崎教会に弟子入りされ、昭和三十七年三月二十四日には金光教の教徒にもなり、修行中に竹内鶴松師が修行なされた愛媛県の川上教会にも修行に行かせて頂いたのであります。

川上教会では、教会長の越智師が、頴璋師をお試しというか、信心の大切なところを教えて下さろうとして、神様に向かうこと、素直になるということ、御用の仕方、掃除の仕方、心配りなど、分からない時に越智師に聞いても、「神様にお伺いさせて頂け」と何も教えて下されなかったり、掃除でも障子の桟を指

で擦るようにして見られ叱られたりと、意地が悪いと思い腹を立てながら親奥様や御信者さんに愚痴を言っては叱られ、当時は何が信心かもよく分からず、一般の仕事を中心にした見方で、社会の常識や、世間の考えに囚われておったと申しておりましたが、越智師もこれだけ教えても分からん者は初めてだと申しておったそうですが、晩年になって、親先生は、そんな社会常識や当たり前という考え方を取り除いて、金光教の信心での見方や助かり方を教えて下されようとしていたので、素直に受けられず逆らうばかりで屁理屈を言う横着や我の強い自分の心が間違っていたと、頴璋師も教会長になられ御用させて頂く中で、越智師が教えて下されたことに気付かれ、話して下されたこともありました。

また修行中の生活、普段の食事は麦飯であられて、頴璋師はあまり食べられたことがなく、里の親姉弟に教会の暮らしを話されると、そりゃ可愛そうだと川田家の里からは食べる物に困らないようにと白米等もお供えはされていたようであるが、須崎教会でも川上教会でも親先生方は、親教会へのお供えや大祭の直会、困っている人のために使われて、教会に住まわして頂いている者は、家族や修行生に至るまで変わらぬ生活を続けておられ、御神前の下に供えられてある米俵を眺めていたこともあったそうであります。

そう言った教会での修行生活をさせて頂いた後、昭和三十八年五月に金光教学院に入学されたのであります。

頴璋師は金光教学院中のことは、その年に三代金光様が御帰幽になられたため、学院生として勉学というよりも御葬儀や、四代金光様への代替わりなどで、慌ただしかったことが記憶に残っていると話されておりました。

ただ頴璋師はあくまで須崎教会の修行生の立場であったために、学院卒業後に金光教の教師

として御用させて頂くためにはどうするかを、考える必要があり、その時に竹内鶴松師に隣接教会でもあられた土佐高岡教会の野村トヨ師が養女となられた野村登茂子（ともこ）師との見合いをしないかとの話をされるのを受けられ、「土佐高岡教会長の野村トヨ師にならついてゆける。」と申されたので見合いがとのい、昭和三十九年四月十五日に金光教学院を卒業すると、洗濯物を抱えたようなその足で、土佐高岡教会に来られることになり住まわれることになられた。

そして、その十日後である四月二十六日には、土佐高岡教会において、早速に竹内鶴松師が結婚式の祭主を仕えられ、高知教会道願正信師、千文奥様の仲人にて頴璋師は、野村登茂子師と結婚され頴璋師は養子に迎えられることになられた。

ただ登茂子師も腎臓病のおかげを蒙られたことのある体にて、医師からは「結婚しても子供を生んではいけない、もし子供が出来ても生む時は死を覚悟しておきなさい。」とまで言われていたので、結婚後の体調のことも思われてのことや、親先生方から見られて頴璋師は養子向きではないと思われる短気な性格を見定められるために様子を見た上でと、同年六月十日に金光教教師に教主金光様より御任命を頂かれた事を受けられて、晴れて野村トヨ師との養子縁組と登茂子師との婚姻届は、同年の七月三日に提出される事になられたのです。

・土佐高岡教会の生活でのこと

御神縁のままに土佐高岡教会において初代教会長の野村トヨ師について、昭和三十九年九月一日より副教会長として信心の稽古に励みてある中にも、最初から信心が出来ていた訳でもな

く、ついつい人間心を先に出して問題になられたことも、一度や二度ではなかったと聞かせて頂いておりますが、ただ頴璋師としては結婚したからといって自分のことは自分でする性格でもあり、いちいち人と相談して協力してさせて頂こうというような気持ちは少なかった。

また頴璋師は何でも小器用にされるために、他人のすることは手間取って遅いようにも感じてしまい、人の御用を取ってしまうところもあられたり、掃除一つでも信者の方と共にとか、お願いするという行為はされなかったので、今まで教会で御用されていた人や、信心の稽古と取り組まれていた人も、若先生がすべてしてくれるからと御用をされなくなったことが、教会として信心の上から見た時には、やり過ぎてしまっていたとも言えたのかも知れません。

そこには常識的なことや、合理的にこうしたら、ああしたらというアイデアが浮かべば、相手のことや信心ということを抜きにして行動に移してしまう面があられたのかも知れません。

それでも自分としては悪いことをしたという感覚がないために、思いがけずに叱られた思いで憤ってしまうこともあったのではないでしょうか。

そのため信心から見られる親先生方、信心をさせて頂こうとされる信者さんとは、時にぶつかってしまうこともあり、間に立たれる登茂子師を気遣い夫婦のためお邪魔になってはと心遣いトヨ師が出て行こうとされたり、若い頴璋師が先に二人も子供を亡くされたのに、登茂子師の妊娠中に命を軽視した行動でトヨ師に厳しく叱られて飛び出して行かれることも時にはあられたり、信者さんに配慮のない言動で信者さんが信心を辞められることにもつながったのではないでしょうか。

その頃は、高知教会、須崎教会、越知教会、窪川教会など、近隣の教会長先生も教導やお叱

りなど、時にはバイクで駆けつけてくれるような方もあられたと聞いており、頴璋師を何とか金光教教師としてお育てを下さろう、親子、夫婦、信者さんとが仲良くいくようにとお導き下されたとも聞いております。

ただ頴璋師にとっては、須崎教会の月次祭の後など、時々に泊まりがけで里の親兄弟の元に戻られる時が、気の休まる一時であられたかも知れません。

・子供が産まれる中に

頴璋師と登茂子師は結婚式を四月二十六日にされると、間もなく妻の登茂子師が妊娠され体のことを心配もされましたが、トヨ師より「心配する事はない、神様のおかげ頂けば大丈夫だ。」と申されるを受けて、産まさせて頂くことになられた。

翌年の昭和四十年二月二十八日にはおかげを頂いて安産でもあり、長女である真子（しんこ）を授かるも、頴璋師は男子を求めてあられたが、女の子であったということだけで腹を立てて、腹立ちまぎれに、産まれてきた子に対して親として言うてはならぬ不足事を申し、産んで下された妻の登茂子師にまで心をえぐるような言葉を掛けるなど、それは登茂子師の命を助けて下され、子の命を授けて下された神様に対しても千万御無礼であられ、そばで聞いていた実の母親にもあまりのことと叱られたと聞き、後日には反省もし、頴璋師自ら御本部の金光様に名前を付けて頂くようにもされたと申してありましたが、あまりのことに神様からもお叱りがあられ、お許しが得られなかったのか、ただ真の祈りを持って神様に向かわれた野村トヨ師、登茂子師の心情も思われてか三月三十日まで一と月間は子供と共に過ごさせて頂きました。

その間、生まれた時より乳も

飲み過ごしておりましたが、その成長を産まれた時より一切止められた様子の発育不全で長女は身退ることになられたのであります。

その後もすぐに妊娠されましたが、妊娠五ヶ月目に戌の日の腹帯とのこと、トヨ師と登茂子師は信心の上では必要はないと思っておりましたが、信心のない医者を始め周りの者に勧められ、心迷って腹帯をさせて頂くことにし八月二十四日の休む前に腹帯をさせて頂くと、夜中の十二時を過ぎた頃、途端にお腹が痛み出し、五ヶ月と言うにそれまで何も無かった体であられたが流産で身退ることになるなど、信心が間違えばおかげを頂かさぬとの親神様の厳しき思し召しを感じるのであります。

その子は長男でありましたが真一（しんいち）と名付けられ、長女と長男は今の教会奥城の礎として、小さな棺に納められ、土葬されることになられたのであります。

頴璋師にとって念願の男の子を亡くされるは、改めて信心を考えさせられたことと存じます。

また二人の子を亡くす中に登茂子師も心を信心一筋に改め、次に真二（しんじ）を妊娠し、トヨ師以外の誰の言うことにも惑わされず、信心のみでおかげを頂くと月日を送る中で、九ヶ月の頃に頴璋師が宇佐布教所の月次祭から帰られ、お供えされてあった宇佐の捕れたばかりのような新鮮な魚があったので、それを自ら登茂子師に勧められ、断り切れずそれを登茂子師が口にされると、親神様として頴璋師に命の大切さ、重さを感じさせられるためか、また登茂子師のお腹が痛み出し、ここまで来て過ちがあってはいけないと、神様にトヨ師、登茂子師は一心に心を向けてお詫びを申し、記念祭の年でもあり、御用に取り組む中で命を助けて頂き、神様からも二人の子の命を持ってお許しを頂けたのか、昭和四十一年八月六日に二男である真二を、

出産から産湯に浸かり抱くまで十五分程の隣知らずの安産で、教会前の医師も臍の緒を切られるだけという、信心のおかげでの安産をさせて頂くことになり、金光様の付けられた「真」の名前も生きることになったのであります。

元来、子供はあまり好きではないと申されていた頴璋師でありましたが、親として二人の子を失うことで気づき反省させられ、そうして子育てをさせて頂く中に、妻の登茂子師の心はさらに信心の稽古に心を向けられ、おかげを蒙られていくことになったのであります。

子供を賜り育てさせて頂ける時の喜びは夫婦共にいかばかりであったのか、長男が成長させて頂く中に、兄弟もと願われ昭和四十六年八月十七日に三男の清治（きよはる）も誕生させて頂くことになったのであります。

今は私（清治）が三代教会長として御用させて頂いておりますが、長女、長男も御霊神様として共に御用下されていると感じるのであります。

・教会長となられてからのこと

昭和四十七年三月五日に、土佐高岡教会は御造営のおかげを蒙り、野村トヨ師は教会長として御用を下されてありましたが、昭和四十七年十月六日に初代の野村トヨ師が心筋梗塞にて御帰幽になられ、同年十一月一日付にて、教主金光様より土佐高岡教会の二代教会長として御任命を賜り、教会の御用に当たらせて頂くことになられた。

頴璋師はその年の十一月十六日に満三十二歳を迎えられる、まだ若い時であり、前日である十一月十五日は土佐高岡教会の大祭日でもあり、初代の後を継がれた初めての大祭は、どういうお気持ちであられたのか。

そうして土佐高岡教会二代教会長として御用に励み、教内においても四国教区教区委員、高知県東部教会連合会会長など務められ、教会においても信者さんに天地の道理を説いて御用下された。

土佐高岡教会には当時は宇佐布教所もあり、信者さんの数も毎日の日参される方も多くありましたが、元々は野村トヨ師を慕っての信者さんでありましたので、その中で御用させて頂くというのは、初代の野村トヨ師と比べられることも多く、気疲れも多分にあったかも知れませんが、人が違えば信心が違うように、初代の信心とは、また違った面を持っておられた頴璋師は、最初の頃は初代の野村トヨ師がされていたように、一人一人に御取次をされ、御祈念をされるという形であったが、定時以外に段々に御祈念はされないようになり、御取次に力を入れられるようになられた。

それにより信者さんから、段々、拝んでくれなくなったと評されるようになり、金光教の信心よりも拝み屋さんに頼るような信者の方は、お参りが遠退くようにもなられたと聞いてもおりますが、頴璋師にとって御祈念、当時はまだ天津祝詞、大祓詞であられたが、それを何巻上げたというようなことは意味があるのか無いのかと、理屈で考えるところがあられた。

それよりも御取次で信者さんの話を聞き、解決方法を模索する方が確かに思われた。

そこで信者さんが抱えておられる問題を探り、知らないだけの問題、常識的な中での問題には、頴璋師は信心だけでなく雑学的に社会のことを物知りでもあったので、相談内容によっては、色々詳しく教えてくれることもあられた。

そのため教会長になられてからの御取次は、初代のトヨ師の説かれた神様、金光様、親を立て抜くということ、日参させて頂き共に信心の稽古をさせて頂

こう、神様に願わせて頂いて、どのようなことでもおかげが頂けないことはない、という内容とは時に違う物になり、代替わりの中で信者さんも、難しい理屈が多くなってこられたと感じられた人もあられたように思います。

例えば、ただ具合が悪いとでも御取次があれば、それはこういう病気ではないか、それならば、あそこの病院が良い、どこそこの病院の先生は上手だ、この先生は下手だ、飲んでいる薬は何か、こういう薬もあるがなどと、信心そっちのけの相談窓口になられるような感も多かったが、そのため頴璋師も普段から、医学書や辞典、地図を見たり、様々なジャンルを選ばずに色々な本をよく読んでおられた。

他にも人のお役に立つこととして教会御用の他に、頴璋師は昭和五十一年四月十日の三十五歳より献血にも通われるようになり、平成三年六月十三日までの五十歳までに、三十六回ほど通われ、表彰をされたこともありましたが、後年病気になられ出来なくなってしまいました。

また料理なども好きで、料理本を買って読んだり、テレビのレシピを書き留めたり、スーパーの買い物などで販売している店員さんに食べ方を聞かれることも多く、スーパーに買い物に行けば二時間近くは帰って来ないことも多く、売っている物や値段などを見て回っていることが多かった。

他にも新しいものや機械物にも目がなく、カメラやカセットデッキやテレビ、ビデオ、ワープロなど新しい物を買ってきては、一日中、説明書を見たり、使って試している姿を思い出します。

そのおかげで、今現在も残っている資料や機械がお役に立っているものもあります。

ただ教会の修繕のことにて、教会の屋根は以前は時々にペンキの塗り替えが必要なトタン屋

根があり、顕璋師は人に頼むことはされず一人で屋根に登られてペンキ塗をされておられた。

夕方になって急いでいたのもあるかも知れないが、トタンの端の方を塗っている時に誤って足場のない所を踏み抜いてしまい、二階の屋根から落ちると言うことがあられた。

下まで落ちれば命も危なかったかも知れないが、一階の少し出っ張ったビニールトタン屋根の上に足から落ちて踏み抜いたことで、クッションとなり途中で止まり助かるということがあられた。

神様に救われたというか、落ちた時には「金光様！」と口から出たと申しておりましたが、おかげを頂き、腰の強打で背骨が滑り症にはなりましたが、その命は救われたのであります。

何でも自分でさせて頂こうという中にはこういう色々なこともあったのであります。

ただ信心の中身として、神様にとっさに心を向けられるというのはあられたと存じます。

教徒の信者さんの宅祭にて、顕璋師がまだ若い頃に祭事に行かれていた時のこと、そのお宅にて家族親族が大勢参られている中で、小さな子供が居なくなったという事にて、皆が探したり慌てている中で、一人の親族の方が顕璋師はどうするであろうかと見ておられると、顕璋師は一人聞いた途端に御神前に向い「金光様、子供が難渋しております。救い助けてやって下さいませ。」と祈っておられ、その祈りが終わるやいなや、家の入り口近くの排水溝の側で危なく落ちる所を助けて貰ったとのことで見つかり、顕璋師は慌てることなく神様にお礼を申し上げておられたとのこと、その顕璋師を見ておられた親族の方は、「先代の親先生（顕璋師）は皆がワアワア言いゆう中でも、しっかりと神様に一人向かっていて、これが信心しゆう者かと見せて貰って偉かったぞ、若先生（清治）ももっと修行せないか

んぞ。」と教えて頂いたようなことでありました。

それらは顕璋師も若い頃から神様のおかげを受けて助けられていたからこその、身についた信心の現れではないかと感じるのであります。

そのようなことで、知らないことをこちらが尋ねても、顕璋師から「知らん、分からん」という言葉はあまり聞かず、「ややこしいこと」と不機嫌に言うことでも、何度も聞けば紙に書いたりして答えてくれることはあられた。

顕璋師にとって「見れば分かる」「聞けば分かる」「行けば分かる」「やってみたら分かる」ことは問題にならず、そのような顕璋師にとって当たり前のことを何度も聞かれることは、苦痛であって、「分かっちゅう、知っちゅう、もう言うた」とつっけんどんに言われることも多かったように思います。

そんな顕璋師であられましたが、信心ということに関しては一貫して「天地の道理」を求めて、説き続けておられたように思います。

そのため「道理に合わない」ことには厳しくもあり、曲がったことや理屈に合わないことは大嫌いで、純粋に金光教を求められていたように思います。

御本部では昭和五十八年、教祖百年祭を機に新儀式に改め、拝詞や祭服を替えられ、「天地書附」を奉体することになりましたが、それ以前からも教会での御用、祭典の仕え方など、金光教の御教えに照らし合わせるようにされ、祓い行事のようなことは心次第で行事そのものに意味のないこととして、奉幣も姿形のない神様に対して人間的に着る物を祭るのは間違っているのではないかと廃止されたり、他宗教的なことは極力行わないようにされていたように思う。

御祈念の拝詞も教会独自の物を何度も何度も作り直されながら、金光教としての信心を与えられるままに受けるのではなく、

自分なりに求めて求めてと求道されていたのではないでしょうか。

その最後の御祈念詞は今でも使わせて頂いておりますが、御礼御詫び御願いの集大成のようにも感じます。

・子供の成長と病気を通じての教師の育成

顕璋師、登茂子師の二男、三男の真二、清治はおかげを頂いて元気に成長させて頂いたが、顕璋師がアレルギー体質であられたので、二人の子もアレルギーを持って生まれていた。

さらに真二においては小児喘息を持っており夜にでも発作が起こると、顕璋師は真二を連れて病院に通われることも多かった。

子供達が小学校の頃には、顕璋師も親として遊びに連れて行ってくれたこともあり、高知県東部教会連合会の各地のキャンプを始め、昭和五十九年に高知の方で黒潮博覧会があった時には連れて行ってくれたり、サーカスが高知に来たと聞こえれば連れて行ってくれたり、子供が休みの時には、里で式年祭がある時など旧東津野村（津野町）に泊まりに行き、帰りには天狗高原や長沢の滝を見に行ったのも思い出として残っております。

顕璋師は子供の勉強の事についても成績にこだわる事もなく、あまり口にされていなかったように思います。

それでも分からない事を聞いていくと、色々とアイデアを出してくれたり、教えてくれたり、手伝ってくれるような事もありました。

また顕璋師は健康と言う事で言うと、あまり気を使っていたようには感じられませんでした。

食べる物は若い時には濃い味付けや、お漬け物が好きで、お

漬け物にも醤油をかけて食べるような事で、血圧も普段から血圧計で測っても、上が百八十から二百近い高血圧でもあり、さらに思い出として顕璋師は若い頃よりタバコは日に二箱、三箱と吸われるようなヘビースモーカーで、教会の斜め前のたばこ屋さんに通われるような所もあられた。

教会でも朝から晩までタバコを吹かしているので、タバコのヤニで教会の中が黄色く染まるような状態でもあられた。

顕璋師は妻や子供が言うても聞かないような方でありましたから、諦めているような所もあり、真二は吸入しながらも親の姿を見て育つというか、喘息の体には悪いのではありますが、後にタバコを吸われるようになられた。

私（清治）も成人してより例にと数年は吸うこともありましたが、最初から煙に耐性があったのか咳き込むこともなく、逆に慣れ過ぎていたためか、高い金を出して煙に消えてしまうのは勿体無いと思うようになり止めることにした。

もう一つ飲酒と言うことについては、顕璋師はお酒を「好き」と言ったことはなかったが、御神酒があれば御神酒を、若い頃にはウイスキーを氷で割って呑むのが多かった。

子供にもテレビを見ながら上機嫌で特に薄めた物を、一口ほど飲ませてくれたことも思い出として残っております。

そんなこともあってか、晩年には子供達もお酒が好きになり御神酒を頂くようになられたので、教会から無くなることも多く、顕璋師は買い物の時などに宝焼酎をペットボトルで買ってこられ、毎晩のようにコップに一、二杯と晩酌をされておられた。

それでもお酒のことを聞くと「お酒は好きじゃない」と言い通され、透析治療をされるようになられて水分量の限られている中にあっても日課のように晩

酌は続けられ、「好きじゃないなら呑まなければ良いのに」と言われることも多々にあられたが、「医者からもアルコールも飲まれないという訳ではないと言われた」と実しやかに言われるので本人の行動に任せていた。

信心の上から言えば、子供の頃には夜七時の御祈念や、祭典への参拝はさせて頂くように教えられ、教話などを通じ、後で分からないことや疑問があれば問うていけば、子供にも分かるように教えてくれるなど、それぞれに導いてもくれていたように思います。

ただ私（清治）は一度、五歳くらいの頃に親に逆らうことがあり、叱られても納得できないことには謝ることは絶対しない子供だったので、最後には頴璋師に頬を平手打ちにされ、「親がカラスを白いと言うたら白いと思え」と言われたが、それでも私は「なんぼ親がカラスを白いと言うたち、黒い物は黒いんだ！」と睨め付けるように言い返してしまったが、今となって、信心の上から見れば、親を立て親を頂いて「白いカラスもおるかも知れん」くらいに思う心も必要なのだと思うのであります。

そのような信心の導きの中で、子供達が高校を卒業すると、大学へ行くか金光教学院に行くかと問われ、二人とも大学に行く気は無かったので、金光教学院に行かせて頂く事になったのであります。

まず真二が高校を卒業し金光教学院に入学、学院中に知り合われた新宿教会の岸井道子師と仲良くなられ、卒業し帰って来られると真二師はすぐに結婚されることになり、頴璋師、登茂子師も初めての子供の結婚であり、高知教会の当時教会長であられた道願正道師夫妻に仲人をお頼みし、真二共々に新宿教会にご挨拶に伺い、学院卒業早々のことで何とかお許しを得て、結婚させて頂けることになり、高知教会にて結婚式を仕え、高知では老舗の得月楼にて披露宴

を開かれるなど、何とかおかげを蒙られ、真二は年が足らず金光教教師には一年遅れることになりましたが、翌年、金光教教師に任命されるを機に登茂子師は副教会長を辞任され、真二師が副教会長になり教会の御用も色々とされておりました。

その中で真二師に長女真希が産まれ、年子で長男の道徳が産まれました。

平成二年になると清治が金光教学院に入学させて頂きました。

その清治が学院中での事、高知教会三代教会長の道願正信親先生が平成二年十月十八日に亡くなられ、頴璋師は終祭を仕えられ、さらに御本部では平成三年一月十日に四代教主の金光鑑太郎君が亡くなられると、土佐高岡教会からも御葬儀に教会教師、信奉者数名を伴い、ハイヤーで御本部に参拝されるなど、頴璋師にとって心の支えをなくすような寂しさもあったのではないかと思うのであります。

そのような事があった後に、清治が平成三年四月十五日に学院卒業すると、平成三年六月には真二師、道子師の二男である真道が産まれられると、真二師は教会のことは清治に任せて、他職に働きに出かけることも多くなり、清治も年が足らないために一年遅れた平成四年六月十日に金光教教師に任命されると、教会では道子師は子育てに忙しいため、教会長の頴璋師、在籍教師の登茂子師、清治師の三人で主な御用をされるようになりました。

そうした中の、布教五十年の三年前くらいより、頴璋師は元々お漬け物が好きでありましたが、その時は異常なほどに、大きなコーヒー瓶に漬けていた梅干しを一日、二日で食べてしまうような状態で、頴璋師も妙に塩分が止められないと言いながら食べておられた。

その内に急に痩せ始めたため、信者さんが心配して、病院で検査して貰って下さいと願われるので、病院に行って検査を受け

ると最初は病院の血圧計で測れないほどの高血圧になっており、緊急入院して下さいと言われる状況であったが、一旦は教会に帰ってきて事の次第を説明すると入院をされるようになられた。

その入院で精密検査をすると、高血圧が原因で腎不全の一歩手前になっていると言われ、治療を開始されることになったが、他にも度重なる胃潰瘍と、胃ガンも見つかり、食道の一部から胃の大部分を切除することになった。

この時に、それまで何があっても止められなかったタバコをすっかり止められることになったが、あれほど吸っていたのにというのを見事に止められ、後で一本も吸われなかったのは、潔くも偉かったと感じるのであります。

そのような中で当然、頴璋師の命に関わると言うことだったので、家族の者も呼ばれ、頴璋師も一度は死の覚悟をされていたようにも思う。

病室に見舞いに行かせて頂いた時に私（清治）の手を取って、涙ぐむように「後のことを頼む」と言われたことが受け継いだものとして記憶に残っている。

手術が無事に成功して帰って来られると、「そんなことがあったかや」と言われていたが、私としては今も忘れることは出来ないでいます。

その時の入院時に頴璋師が病院の屋上にて太陽を拝まれた時に詠まれたものが、「日天四様
地上に生きる 総てのものに 今日もひとしく 命与ふも」「一日中 お輝し下され 有難き 西の上にと 静かしおかくれ」「日天四様の 輝す下には 善悪の 差別なし すべてが平等なり」という御歌であります。

新たに賜られた命を感じての御歌ではないかと思うのであります。

そんな頴璋師をその後に亡くなるまで悩ましたのは、胃ガンにて胃の切除をされた時に、ゆっくり食べることを医者から言

われましたが、子供の頃からの早食いの癖がなかなか抜けず、つい早く食べてしまい手術した食道で詰まることも多く、一口目で詰まると、どうすることも難しく難儀をされたことでもありました。

また食後にダンピング症候群が起こり、頭の先から真っ赤になるように心臓も動悸が激しく、食べた後には椅子の背に、グッタリとなってもたれている姿を晩年まで見ておりました。

他にも頴璋師は入院中に院内感染にも罹り治療されたりもしました。

ただ肝心の腎臓の食事療法はあまり効果無く、ついには腎不全の数値にまでなり、医師より透析治療を進められ、シャントという透析治療の針を刺すための血管を作られるために、手術を受けられることになりましたが、その時の担当の外科医は徳島県から来られていた方で、家は金光教の信心をされておられるとのことで、親身になって上手で丁寧な手術をして下さり、無事に透析治療が受けられるようになったのであります。

その担当医の方も頴璋師の手術をされると、徳島の病院へと帰られることになり、さらにこれから透析治療を始めるに当たり、それまでは病棟そのものがなかったので、他の病院に行かねばならないかも知れないと思っていた所、土佐市の病院にも専門の透析治療室が作られることになり、どこに行くこともなく無事に受けられることになるなど、神様のお導きかおかげを蒙らせて頂いたのであります。

さらに教会にとって病院通いは財の上にも難しいことでありましたが、透析治療となったために、病院で様々な手続きを教えて頂き、頴璋師は身体障害者一級の認定になり、治療費の心配もすることが無くなり、他に障害年金も受けられるようになるなど、教会への負担はなくなり、安心して治療を受けられることにもなったのであります。

また病気としては他に大腸のポリープ切除などもなされましたが、顕璋師の直腸が他の人より長く、グチャグチャになっており、土佐市の病院ではカメラを入れることが出来ず、高知市の近森病院に名医が居るとのことで紹介して頂き、その名医ですら難しいと何時間もかかったそうですが、切除手術も無事に受けられることができたのであります。

そのようなことで布教五十年の頃は度々に入退院を繰り替えされた。

そのため教会長としての御用が出来にくくなってきましたが、丁度、御本部では大幅な教規改正を行われた時期で、教会長は入院中のために、私（清治）は教会長の代理として委任状を預り、当時、伊野町にあった法務局にも通い、教会での御用、御本部や四国教区での会合、高知県教会連合会の出席など、色々の経験を積ませて頂くことになり、このことがあって、私（清治）も金光教の教師としてお育てを頂くことになったのであります。

顕璋師にとっては病気が次々に起こり、入退院を繰り返すなど大変ではありましたが、二十歳の時に半年の命と医師に言われたのに、金光教の信心に出会い、お助け頂き、金光様の御取次の中に、金光教の教師にならせて頂き、教会の後継に行かせて頂き、結婚、子供をお授け頂き、子供の成長、次の世代にと信心を伝えることもさせて頂き、その上で三十四年後に、元の病に戻されるは、神様が病気を掴まえて下さり、無常の風が時を嫌わせて下さったと思うのであります。

その後、顕璋師は体が弱られる中にも、教会長として御用下され、平成八年九月二十三日に布教五十年記念大祭を仕えた後、ただ信者さんもどう思われたのか、信心を止められたり、他宗教に代れる方などが多くなり、信者さんの数は半数近くまで減

らされると言うことになったのであります。

さらに、それまで御用させて頂いていた宇佐布教所もお借りしていた信者さんの都合にて平成十年八月七日に閉所させて頂くことになったのは、残念にも思うのでありますが信者さんにとっても一時代の区切りと言うことになったのかも知れません。

その後、頴璋師は平成十六年六月十三日に教主金光様より教師四十年の褒賞を賜り、平成十八年九月二十三日に土佐高岡教会では布教六十年も高知教会より講師に道願正道大先生、祭主に道願正美親先生を迎えさせて頂き無事に仕えられ、また頴璋師は透析治療をされるようになる中にも、お役に立つ働きをさせて頂きたいと、腎臓友の会の幹事をされるなど、同じ病気に苦しむ人たちのお世話もされていました。

そんな中、平成二十年十月三十日に真二師、道子師の長女の真希も年頃を迎え、結婚して上原家に嫁ぐことになり、頴璋師は孫の結婚式も見られることができ、その年の平成二十年十二月四日に肺炎にかかり、入院するに当たって、教会長の御用も満足に出来られなくなったので代わってもらいたいと申された。

ただ真二師は副教会長であられたが、教会の御用は私（清治）が在籍教師のままで総てさせて頂いてきたので、それぞれの意思の確認をさせて頂き、真二師は妻も子供もあり、現状の教会では生活もままならず他職を続けたい、私（清治）は逆に独り身で教会の御用しか知らず、例え餓えても他職に就くつもりはないとの思いにて、それなら教会長の御用は私（清治）がさせて頂けばいいということに決まり、責任役員や総代の信者さんにも事の次第を伝え、十二月二十六日の年の暮でありましたが御本部にお届けをさせて頂いたのでございます。

御本部では教務の御用が終わっていたために、年が改まった

平成二十一年一月十四日付けで、教会長の辞任と新教会長の任命が行われたのであります。

それは金光教においては立教百五十年のお年柄の年でもありました。

顕璋師にとっては金光教の信心に出会った立教百年の年より、五十年という区切りの年でもあり、教会長として三十六年を迎える中でのことでありました。

・病の治療と体の不自由さの中で

顕璋師は教会長辞任手続きのその間も病院にずっと入院され、肺炎はおかげで回復させて頂いたのでありますが、如何なる事か目の眼底からの出血が止まらず、血の涙を流されるような状態であられ、退院するまでには二ヶ月以上かかることになってしまいました。

さらに脳梗塞にもなられましたが、脳梗塞の治療は血をサラサラにするのですが、透析治療では大きな針を使うため血が止まらなくなるのは困るという逆の治療法になるため、命の重要性の順番で透析治療は止められず、体が不自由になったとしても脳梗塞の治療は行わないということになったのです。

そのために顕璋師は脳梗塞も進み、歩くこと、手を使うことなどが晩年は不自由になり、転けて怪我をされることも度々ありました。

それでもおかげで生活できるまでに回復させて頂き、退院をさせて頂くことになりましたが、その間はベッドの上での生活だったので、筋力も落ち、顕璋師もベッドから落ちた軽い羽毛の掛け布団すら持ち上げることが出来なくなったのは自分でも涙が出るくらい情けないものだったと話しておりました。

また眼にも眼底出血など治療したために見ようと集中すれば

中心に黒く見えない箇所があり、それで本も読むことも、字を書くことも難しくなられ、入院前までではさせて頂いていた御結界での御用も出来なくなったのであります。

顕璋師は若い頃には器用で何でも出来ておられただけに、何一つ出来なくなると言うのは本当に辛かったことだと感じます。

入院前までは自転車にも乗れ、透析治療や買い物にも行けておりましたが、退院後にはさらに段々に体も弱られて、透析治療に通うにも、真二師の運転する車で送り迎えが必要になり始め、さらに教会では一人でお風呂に入ることも出来なくなってきたために、週三回の透析日の合間には、デイサービスに通うことになったのだが、当時は何処も満員ですぐには入れそうになかったが、日を待たずに教会の近くにデイサービス「なごみ館」が出来て入れることになった。

そして教会近くのデイサービスに車で送り迎えされて通われることになった。

顕璋師の場合、神様のおかげに導かれているように、人や建物、施設など必要になられた時には近くに出来られるおかげを蒙っておられたように思う。

そうして顕璋師は月水金は透析に、火木はデイサービスにと、教会には土日以外は透析日は昼から、デイサービスの日は夕方以降しかおられることがなくなり、教会長として御用されていた時には月例祭や大祭では病院の透析時間をずらして仕えることもあられたが、教会長を譲られてからは、私（清治）に祭事を頼まれて教会を出られるようになられた。

それでも教会におられる時には、在籍教師として御用の上において参拝される方と話しをして下されたり、祭事の準備などでは、裁ち物なども見えづらい方の眼を閉じたり、多少手が震うと言いながらも時間をかけて工夫をし手伝って下されたり、徹夜の御用ではコーヒーを作っ

てくれるなど、心配りをされるようになされていた。

また顕璋師は若い頃には家族にお礼を言ったり、頼むということもされなかった人でありましたが、病気になられ不自由になられる中に、信心の目が開かれたというか、四代金光様の詠まれた「世話になるすべてに礼をいふ心」「何一つ世話にならねばなし得ざる／われぞとおもふ世話になりつつ」との御歌を信心の中心に頂かれ「お世話になります」「有り難う」という言葉を世話をして下される方々や家族の者にまで言われるようになっておられた。

そんな不自由をされながらも顕璋師にとって一つの楽しみは晩年まで近くのスーパーへの買い物があったのではないかと思われます。

透析治療のため手で重い買い物袋は持てなくなっていたので、背負いリュックの買い物袋を提げて、夕方になると、車椅子を押し車のように自分で押してゴトゴトと買い物に出かけられ、時に二時間、三時間と戻ってこず、教会でも心配し始めると日も暮れかけた頃に帰ってくるなど、一度はスーパーで疲れて動けなくなり、スーパーの店員さんから電話を教会に掛けて貰い、日も暮れた夕方六時頃に慌てて迎えに行って、顕璋師の座られた車椅子を押して帰ったこともありました。

ただそんな中が出来られていたのも、顕璋師の頭はハッキリしておられたからだと思う。

病院の医師に言わせれば「脳梗塞の治療もしていないし、脳の血管もあちこちで詰まっている状態が見えていて、これで認知症にならないのがおかしなぐらいだ。」と言われていたらしい。

それでも頭がハッキリされておられるからこそ、ゆっくりでも工夫してさせて頂けたのは、おかげの中でのことであった。

ただ何かをされる度に段々に疲れやすくもなり、力が入らなくなられ、歩くことも前に進ま

なくなってくると、教会の中でじっとされることも多くなってこられた。

そんな中で、いつもお好きで登茂子師が作ろうかと言っても「儂がする」と言っては一人でされていた素麺を湯がいて食べようとされる中に、熱湯の入った乳沸かし程度の小鍋をついに持てなくなって落としてしまい、大火傷された事もあられたが、病院で医師から家族、特に登茂子師が責められ叱られたらしいが、頴璋師は知らぬ顔をされていたようで、本人が好きで勝手にやっていたことは、黙っていたようだった。

そんなことがあられてからは料理をされる事もなくなり、普段は広前脇のテレビの前に据えた椅子に座ったまま眠られることも多くなってこられた。

頴璋師は透析を始められた頃は手術を受けながらも、まだ元気な時には一人で御本部参拝もされていましたが、車椅子が必要になられてからは、四月と十月の御本部大祭に団体バスでの参拝で真二師が付き添いで行ける時に限られ、また一月、六月、十二月は真二師の運転する教会の車で連れて行って貰える時だけの御本部参拝になっていました。

それで平成二十三年の一月の初参拝も祭典時間に縛られない参拝でしたし、皆がそろっていたためか、子、孫、ひ孫など時々によって車椅子を押して貰い、元気そうに喜んでお参りをさせて頂いておりましたが、それが最後の御本部参拝となられたのであります。

その後の頃からは布団に横になって休むのにも真二師や清治師に頼んで手伝って貰うことが必要な体の状態になっておりました。

・最期に向けての御修行

そんな日々を送る中に、平成二十三年二月十一日の朝は、透析治療にいつもの通り行かれたのですが、治療中に熱を出していることに看護師が気付かれ、担当医師の診察では敗血症という診断が下り、緊急入院と言うことで、ナースセンター側の集中治療室に入院させられることになり、胃腸、胆嚢など炎症が起こる中、二十四時間点滴にて絶飲食となり治療を受けられることになったのであります。

この入院は最初から、普段の入院と、どこか違う嫌な感じが致しており、私（清治）も一心に教会で回復を御祈念させて頂いたのでありますが、まずは御取次を頂こうと御本部参拝させて頂き金光様に回復の御願い御取次をさせて頂き、その後で、高知教会、須崎教会と関係の教会にも参拝させて頂いて、親先生、教会長先生に、それぞれ回復の御取次お願いをさせて頂きました。

そのおかげもあってか顕璋師は一時は快方にも向かいましたが、さらに大腸に血管の瘤ができて、透析治療のたびに医師からは「このまま血管が破裂すれば死んでしまいますが、透析治療を止めても死につながりますので、家族の方は覚悟の上で付き添って下さい」と言い渡され、透析治療される横の椅子に座っていると、顕璋師の今まで聞いたこともないような絶叫で「止めてくれ！」と痛みに苦しみ叫ぶ声を聞きながら、心中御祈念しながら千羽鶴を折って、少しでも痛みが取れるようにお願いさせて頂いておりました。

顕璋師は病室に戻ってもグッタリした様子で、透析が終われば痛みもなくなり、眠るように過ごしていましたが、そんな中で、三月十一日に東日本大震災

があり、テレビで惨劇が放送されているのを見て、「わしもあの様にいっぺんに死ねたら楽やのに…」と登茂子師の側で口に出したのも、東北の地を思えば金光教の教師としては決して言うてはならぬ事であったにせよ、あの想像を絶する激しき痛みに耐えながら生き続けなければならぬのも、余程体と心に堪えていたものと今ならば、我慢できんところまで辛抱されていたとも思うのであります。

　頴璋師は言葉では弱みを見せないところもありましたが、心中には言うに言われぬ不安も多く抱えておられたのではないかと思うのです。

　その晩年に至った心底には、おかげは徳に応じたものであり、徳の無い者がどんなにお願いさせて頂いたところで、おかげが頂けないものはおかげが頂けないのだ、病気であっても自分のような慢性の病気やガンなど、なんぼ神様と祈ったところで、無理な事もあるし、治ることは絶対にないとの思いが抜けきれず口に出して言われる事もあり、次々に病気が起こり始めた時には諦めたり悲嘆に暮れることも時にあられたようであった。

　また妻の登茂子師が付き添っている時には、今までのお詫びを申し「口では偉そうなことを言うていたが、それはあんた（登茂子師）を信頼していたからや」と涙を流し、感謝をされたようなこともあられたと聞いております。

　そんな反省と苦しみ痛さなど逃げることの出来ない生き地獄は、避けては通れぬ自分自身と向き合うような最期の御修行であられたようにも思うのであります。

　それでも、その荒行のような御修行を過ごされるような入院治療にて、五十三日間を生かされることができ、四月四日までには家族親族の皆に会うこともでき、家族の者に見守られる中、四月五日のまだ日も昇らぬ午前三時五十分を過ぎた頃、教主金

光様のお出まし御祈念に合わせるかの如く、苦しき息も呼吸を静かにし始め、ゆっくりした時を家族達に看取られ、午前五時三分に、齢満七十歳四ヶ月二十日というをもちて御帰幽になられたのであります。

私（清治）は教会長として一足先に、桜の花も咲きて散りゆく病院側の公園を通り、急ぎ教会へと戻り、神様、御霊神様に御取次させて頂き、午前五時三十分からは心を静め朝御祈念を信者さんとさせて頂き、皆にも頴璋師の亡くなられたことをお伝えし、教会では帰られた頴璋師のご遺体を広前に布団を敷いて寝かせ、皆でお別れをさせて頂き、私（清治）は頴璋師に大祭用の祭服を着付けさせて頂いたが、生前に頴璋師より葬儀と言うても間違ったように着せるような逆事はするなと言われていたので、いつも通りにちゃんと着付けをさせて頂いた、その後に葬儀社の用意してくれた棺にと皆で納めさせて頂いたのであります。

・御葬儀のこと

御葬儀は頴璋師が生前から「教会長だからと言って派手にする必要は無い、質素であっても教会で行ってくれたらそれでいい、神殿も別に設える必要は無し、御神前でさせて頂けばそれでかまわない。花輪もいらない、どうしても花をと言うなら気持ち程度の生け花で良い。」と申しておりましたので、教会ですべて行うことにさせて頂いた。

遺影の写真は、教会長として元気に御用下されてあった、平成十八年の元日祭の後に撮った記念写真を使わせて頂いたのでした。

準備も教会の者でさせて頂き、祭具も教会の物を使わせて頂く

ので、真二師も勤めていたこともある気心の知れた葬儀社には棺とドライアイス、葬儀の蝋燭立、お返しの品と、火葬場に向かうハイヤー、火葬場他の手続き、骨壺など最低限のことだけをお頼みさせて頂きました。

私（清治）は高知教会に御葬儀をお願いさせて頂き、教務センター、御本部にと連絡手続きをさせて頂き、須崎教会、高知県教会連合会会長にも連絡させて頂き、教会の責任役員、信徒総代一同にも皆に知らせて下さるようにお頼みし、教会で御葬儀がさせて頂けるように準備を調えていったのであります。

今まで私（清治）も信者さんを何人も御葬儀させて頂き、手順としては何を準備させて頂くかは分かっているつもりでありました。

まず祭詞の都合があるから、戸籍謄本と御本部に問い合わせて役職などの金光教教師としての履歴書をファックスで送って貰って高知教会に改めて参拝させて頂くことを最初にさせて頂きました。

ただその時に道願正美（どうがんまさみ）親先生は丁度、東京に行かれているとのことで、急遽連絡をして下さり戻ってきて下さることになりました。

祭詞はその間に道願正道（まさみち）大先生が、お世話になった頴璋師のことであるから書いて下さるとのことで、これからのことをお頼みし、教会にすぐに戻ると、お供え物を買いに行かせて頂きました。

その時になって明日の四月六日は教会の月例霊祭日でもあったので、その準備もさせて頂かねばならないと気づき、買い物を済ませ教会に帰り、御神前と御霊前を掃除させて頂き、前もってお供えをさせて頂いたのです。

夜になり葬儀に必要なものとして、会葬される方に配る葬儀のパンフレットと、玉串用の垂を作らせて頂くことにし、とりあえず百部と百枚を準備させて

頂くことにしたのであります。
また準備をする中で、近所に知らせるための看板も作らせて頂こうと、葬儀の書き方は葬儀社で勤めたこともある真二師に聞いて用意をしたりもしました。
そうして早速に教会の門柱に木板ごとくくりつけてきたりして準備を進めたのであります。
徹夜のまま四月六日の朝を迎え、朝御祈念は五時三十分からいつも通りにさせて頂きました。
朝の御用が終わり、広前を片づけ月例霊祭の準備をさせて頂くのです。
午前十時になると終祭前でのことでもあり、祭服を着けた頴璋師と最後の月例霊祭を私（清治）は共に仕えさせて頂きました。
土佐高岡教会の内殿は狭いので都合で霊前側に棺を寄せていましたが、実際に祭主の場所の椅子に座ると私（清治）の目の前に棺があり、顔前の扉を開けているので祭帽祭服を着け眼鏡を掛けた、いつもの父、頴璋師の顔が目に映っておりました。
ただ私（清治）には何とも言えず、死んでいると言うより寝ているようにしか思えない。
私（清治）の感情は悲しいとも思わず、感情を無くしたように淡々と祭詞を上げて祭事を仕えておりました。
それでもやはり亡くなったのだと思うと、神様、御霊神様に、改めて御霊の助かり立ち行きをお願いさせて頂いていました。
そして祭典が終わると信者さんにお話しをさせて頂き、普段着に着替えをすると教会奥城に参拝させて頂きました。
その頃には皆それぞれに忙しく教会も留守になる状態でありました。
ただし、こういう時だからこそ、泥棒にでも狙われては困ると思うような妙に冷静に考えることもあるのです。
私（清治）は御霊前の金封はすべてまとめると、こっそり頴璋師の棺の中に入れさせて頂き隠して頂くと、留守番を棺の中

の頴璋師にお頼みして教会奥城に参拝させて頂いたのです。
掃除をし水を替え、榊をさして、改めて頴璋師のことをトヨ師を始め奥城の方々にお頼みをさせて頂きました。
そして教会に帰ると棺から隠した金封を取りだして改めてお供えし、頴璋師に留守中のお礼を申して終祭の準備をさせて頂きました。
そうする中で設えもでき、会葬される方も皆そろわれて、私（清治）も賛者として御用させて頂くように祭服も着けさせて頂いて、午後六時を迎えたのですが、肝心の祭主である道願正美親先生が来られないので、高知教会に確認の電話をすると、「そんなはずはない午後五時には出発した」とのこと、どうしたのだろうかと心配していると親先生が無事に到着されたのです。
親先生として急いでこようとしたが、途中の道路で事故があったらしく、遅れたとのこと。
頴璋師が親先生が急いで事故でもされないように、落ち着いて安全運転で来られるようにされたのかとも話したことでありましたが、最後の準備をさせて頂いて、終祭を仕えさせて頂きました。
頴璋師の諡号は、
「故野村頴璋美志道次秀貫歩大人之霊神（もとののむらひでありきうましみちつぎひでつらゆきうしのみたまのかみ）」と高知親教会より賜りました。
終祭は心を込めて、告詞、霊璽奉遷、終祭詞と親先生がお仕え下さり、有り難く御礼を申させて頂いたことでありました。
頴璋師は生前に、「御霊遷しでも心配せんでも良い、親先生が仕えて下されば自分で御霊代に移るから。」とも言うて笑っていて下さった様なこともありました。
その後、会葬者もお別れを申され皆帰られ家族の者だけになると、告別式の話しをさせて頂き、終祭より多く参られる方の

事を考え、告別式の設えを考えてみたり、どうさせて頂くかを簡単に練習してみたりもした。

その時には八足や説教台など使えそうな物を設えていったりもした。

そうしていると、隣近所の方が駐車場を使わせてくれることになったのは有り難く思いました。

そして受付は真二師の子供達がしてくれることになって、改めて終祭で使わせて頂いた分のパンフレットと玉串用の垂を補充で作らせて頂いたりもした。

気を張っているというか、殊更に事務的に最後の夜と告別式の準備をしながら、夜伽の通夜をさせて頂いたような感じでありました。

私（清治）としては二日目の徹夜で疲れてもいるが寝る気にもならない状態でした。

そのまま四月七日の朝を迎え、いつものように朝御祈念をさせて頂きました。

この日は午後十二時に出棺のため、すべての準備を急いでさせて頂きました。

その内に信者さんや身内など早くに教会に来られ、遠方の教会の先生方も来られ、教主金光様の名代としては当時は四国教務センター長であられた川上教会長の越智眞晴（おちまさはる）師がなされ、本人は来られておりますが、その四国教務センター長の名代として高知県教会連合会長であられた土佐清水教会長の和泉道信（いずみみちのぶ）師がなされ、今度は高知県教会連合会長の名代として東部地区長であられた越知教会長の西川英資（にしかわえいすけ）師が弔辞の挨拶をされることになり、失礼ながら本人が居ながらの名代、名代と何か可笑しいような気が致しました。

私は教会長として棺の側に座らせて頂き、皆様がなされるお別れなど、それぞれにされていくのを対応させて頂いておりました。

その時に声をかけて下された

先生から言われて気づいたのですが、私（清治）の目が充血していたようだが、父が亡くなって一度も涙を流してもおらず、泣いていた訳ではなく寝れなかっただけのことで、自分には情がないのかとも一人で思った程でもありました。

そして私（清治）は告別式を間違わぬようにと、この日は早く来て下された親先生と準備と式次第の確認をさせて頂いておりました。

高知親教会と土佐高岡教会では多少式次第に違いがあったが、葬儀パンフレットなどの都合もあり、そこは土佐高岡教会の式次第に合わせて頂いた。

拝詞、祭詞、玉串、喪主玉串、弔辞があり、弔電があり、会葬者玉串、拝詞、祭主挨拶、喪主挨拶、出棺をさせて頂いたのです。

そして高知市斎場に車を連ねて行かせて頂くと、火葬場祭、火葬、収骨と進み、頴璋師は小さな骨壺に収まって、元来た道を教会に帰ってこられました。

それらも頴璋師は生前に、「火葬場から行きと帰りの道をわざわざ変えて行く方もあるが、そんなのは迷信に過ぎない。

御霊からすれば、生きている人間と違って迷うことはないから、同じ道で行き帰りすれば良い。」と申されて、逆事や迷信などは大嫌いで、葬儀の仕え方などは私（清治）にも色々と言うて聞かせて下さっておりました。

教会に帰り着くと御霊璽と共に骨壺を新霊床に設え、葬後霊祭を仕え、親先生を始め最後まで残っていて下された方々と精進落しをさせて頂きました。

そうして私（清治）もようやく息を吐く事が出来たような状態でありました。

その足で高知教会に真二師の運転する車で参拝させて頂き、親先生に改めて葬儀の御礼を御取次お届けをさせて頂きました。

葬儀の後もすぐには休めず、家族総出で葬儀帳簿を付けさせて頂いたり、後片付けをしたり

と休ませて頂けたのは深夜になってからのことでありました。

そうやく、ぐっすり休ませて頂き、朝の御祈念からはいつも通りにさせて頂き、葬儀社にも支払いも済ませると、ようやくいつもの教会の御用にと切り替えていったのであります。

・霊の神となられてからも

四月十五日は土佐高岡教会において天地金乃神大祭日であり、顕璋師の十日祭の日でもありました。

私（清治）は大祭の準備を始め、二つの祭典の祭詞など準備を調える必要がありましたが、御本部の大祭が終わってすぐのことでもあり、バタバタといつも以上に祭詞なども作成するのが遅くなってしまいました。

四月十五日の顕璋師の十日祭は私（清治）が大祭に引き続いて祭主をさせて頂くことになっており、ただ顕璋師の祭詞としては私（清治）が始めからの作成のため、色々な感情も相まって考えがまとまらなかったということもあります。

その時のことで私（清治）は顕璋師が亡くなられてからは、顕璋師がいつも座っておられた座椅子の場所に座って、御用させて頂いていたのだが、疲れからか、ついウトウトと居眠りをしてしまった。

夢か現か、フッと右後ろの普段はカーテンが掛かっている所に、顕璋師の黒衣姿が見えたような気がした。

その顕璋師が、口を開いてアーアーと言っておられる。

それは生きている様相ではなく、一瞬はドキッとしたが、怖いと言うより冷静に見られた。

その顔は私（清治）が最後の着付けで祭服を着せていた時に、顕璋師の上半身を抱え上げた時に、首が後ろに倒れかかり口が

開いて、私の手で肺を押してしまったのか、亡くなられた後に私（清治）の顔に最後の息を吹きかけるように声帯を震わせて発した「アー」という低い声と姿であった。

そのため私（清治）には、その黒衣姿が頴璋師であろうと思わされた。

その次に頴璋師が夢の中で今度は生きて元気に御用されていた様子で、戸棚の中の祭詞教本を開いて見せてくれている姿が、その後には思わされた。

その夢は起きてから後も忘れることが出来ずに、何かを教えて下されていたのだと感じた。

御霊となられても一緒に御用下されているようにも感じさせて頂き、その後には現実の祭詞教本を基にして無事に祭詞も出来上がり、大祭も十日祭も無事に仕えさせて頂くことが出来たのであります。

その後の十日毎の御祭りも、おかげの中で仕えさせて頂くことが出来たと思うのです。

それは四十日祭の時には、丁度、伊野教会の大祭の日でもあり、私は大祭講師を受けていたので、共に御用させて頂いているような気持ちでもあったのでありました。

そして五月二十五日には、須崎教会長竹内一典（たけうちかずのり）師に祭主をお頼みさせて頂き、五十日祭並びに合祀祭を仕えて頂き、教会奥城では私（清治）が祭主を仕えさせて頂き、納骨墓前祭を仕えさせて頂き、御遺骨を教会奥城へと納めさせて頂いたのです。

この墓前祭で唱えさせて頂いた墓前拝詞は、頴璋師が生前に作られていた物が、部屋を片づけている時に出てきたので初めて使わせて頂き、それからは独自ではありますが土佐高岡教会での墓前祭の時には必ず使わせて頂くようにさせて頂いております。

その後は教会御霊舎にて七月十四日に百日祭を仕えさせて頂きましたが、これはあまり仕え

ることもない祭典でありますので、私（清治）一人で仕えようかと思っていたぐらいで家の者にすら誰にも言わず、一緒に御用下さっていた登茂子師と二人だけで静かに仕えさせて頂いたのですが、その日は何思わず他のことにてお礼参拝に来られたとのこと珍しく高知上町教会から道願和子先生がご参拝して下さり、お日柄のことでありましたので、これも御霊神様のお導きであられたかと、一人思わせて頂いたことでありました。

また私（清治）のことにて、夜に一人でお酒を飲みすぎることも多く、普段であれば自分の部屋や、広前で母に心配かけて寝ることもあったのですが、頴璋師が亡くなられて後のこと、その時は、目が覚めると自分がどうしてそこに居たのかは分かりませんが、御霊前の前の膝突の上で横になって朝方まで寝ていたこともあり、御霊神様となった父、頴璋師が周りの者に心配をかけさせぬように、お引き寄せ下さり御心配を下されたのかなと感じたこともありました。

他にも血筋というかご縁というか、この同じ年の十一月三十日には、実兄である川田温聖（かわだはるまさ）氏も亡くなられ、葬儀は須崎教会長先生がお仕え下されたそうで私達は何も知らず、私（清治）は須崎教会長先生よりご連絡を頂いた時も、丁度、高知教会の大祭準備に参っている時でもあり葬儀には参列できませんでしたが、別の日にと教会家族で頴璋師にとっても里の家にと落ち着いて参らせて頂いたことでありました。

後になって気付かせられること、気付くことも多いものでありますが、頴璋師も亡くなってから後に実家の御先祖にお参りをして貰いたかったのかも知れません。

ただ私（清治）にとって、頴璋師は晩年は教会に居ないことも多かったものですから、亡くなられた後もどこか生きていて、病院にでも行かれているような

感覚になることもあったもので、今でも教会で共に御用下されていると感じるのであります。

・故野村頴璋大人遺稿集（再掲）

頴璋師が亡くなられてより、部屋の片付けや遺品整理させて頂く中に、講話などで使用された原稿が見つかり、教会だより や式年祭の偲び草にて使用させて頂いてきましたので、改めてまとめて再掲させて頂きますので、本文等と併せてご覧下さい。

○教会だより二〇一二年四月号より

『天地の親神様と人間』

本教の信心を求める上に大切な事は、おかげがあるか、ないかではない。

天地のお恵みお働きの中に生かされている生命に対してお礼が言えるか、不足に思うかである。

人間が生きるということは、容易ではありません。

次々と難儀の連続が生きるということでありましょう。

神様も「子供が産まれたらお祝いよりも、お悔みをいうてやれ、そこから難儀な生活がくるのだ」という意味のお言葉がありますように、それではお礼などどうしていえるものか？ということになるのですが、難儀の数だけ喜びもあるのです。

難儀の裏返しは何でしょう。喜びです。

難儀を如何にして喜びに変えて行くかということが、信心であります。

難儀を難儀として難儀に思うだけ

であれば、それは信心の世界ではありません。

病気になれば確かに痛みや苦しみに耐えなくてはなりません。

お金がなければ、時には惨めに生活をしなくてはなりません。

人間関係が悪ければこれまた苦しまなくてはなりません。

病気になれば痛みや苦しみに耐えなければなりませんが、おかげでないとはいえません、病気になることにより、人の心が分り、又人を思いやる心も生まれます。

痛み苦しみに耐えて全快したときの有難さ喜びは言い様もない程のものであります。

お金のことも、人間関係も同様であります。

教祖様が教祖になれたということは、人間の難儀苦しみをいやというほどなめつくしたからであります。

自分が苦しみ悩まれたそこに人の苦しみ悩み痛みを感じ何とかしてやりたい助けてやりたいとの思いが段々強くなっていった、その思いと神様が人を助けてやりたいという思いとが一つになったのだと思います。

では私共もそれそれ難儀に出会い金光大神様の御取次のお働きを受けて助けられての今日であります。

神様は私どもに今難儀であった時のことを思い出し人の難儀を助けてやって欲しいと私どもに願われているのです。

○教会だより二〇一四年四月号より

『おかげは天地の道理にそうたもの』

「物の道理というものは何でも一つである。

天地の道理を説き教えられた

のが、この道である。

此方の日々話すことは、この理を説き聞かしておるのであるから、よく物の道理をわきまえて、道理に違わぬように信心せねばならぬ。」

どなた様にも今日は生神金光大神大祭並びに立教記念祭を共々にお仕えさせてもらい有り難いことでございます。

今日は教祖様が天地金乃神様より立教神伝を頂いたお日柄でございます。

旧暦で安政六年十月二十一日この日を新暦に直すと十一月十五日になったところから、十一月十五日が立教記念日として、御本部広前にては、教主金光様ご祭主のもと午前十時よりご奉仕になられたことと思われます。

さて、教祖様は信心が進むにつれて天地の道理をお悟りになり、人間は皆等しく天地の中に生かされて生きているのであってこれこそが、天地の道理であると悟られたのであります。

このことを分かってみると、難儀の正体が分かって来るのであります。

難儀の正体は天地の中のすべての物の働きを受けて、生かされておりながらも勝手に生きることが、難儀の正体であると言う事であります。

四代金光様は「世話になるすべてに礼をいうこころ」とお諭しになられました。

また「何一つ世話にならねばなし得ざる／われぞとおもふ世話になりつつ」とお歌をよまれました。

私どもは、おかげについて信心しているのにどうしてこんなに難儀が起こるのだろうとよく申しますが、難儀はなんでもかんでも神様がなされたことのように申されますが、よく考えてごらんなさい、自分が作った難儀がほとんどであります。

夫婦の中でも自分中心にして物を言ったり行動したり致しますとそこには、相手があるのですから問題になります。

親子であっても他人であっても同じことです。

また、病気にしても、度々病気をすると、神様のからのように申しますが、心得が悪くて病気をする人、また、その方の生まれ合わせで病弱な人もあります。

これ皆天地の道理であります。

教祖様は「万物を見て道理に合う信心をせよ」と教えられておりますように、草木でも動物でも、一様に同じとは限りません。

四季四季で枯れるもの、何百年も生きる物とあるように、人間もまた生まれてすぐに死ぬる者から、百歳以上生きられる者など、ほとんど病気を知らずに長生きする人、病気ばかりしながらでも長生きできる人もあります。

これみな、この世に生まれる前から、寿命は決まっているのであります。

障害者として生まれなければならない人、途中から障害者になる人、それでは、そんな事が分かっているのなら信心してもしなくもかわらないではないかと思われるでしょうが、しかし、だからこそ、信心がいるのです。

その中をどのように生きてゆくかが大切なのであります。

自分で生きているのではない、あらゆるものにお世話になっておかげで生かされているのであります。

でありますから、金光様がおっしゃるように、まずはお礼を先に申すのが道理ということになるのです。

また教祖様は「生きている者にはみな、おかげはやってあるぞ、ご恩忘れなよ。」私どもが生きているという事が天地の道理であり、天地の道理はこれすでにおかげであります。

今年は大変夏から秋にかけまして台風が多く日本に近付きまた上陸し、新潟県には中越地震が起こりまして大変な災害をおこしました。

人間の立場から見ると台風に

しろ地震にしろ、大変な災害でありますが、天地から見ればそれは、人間の体に例えれば何処かに腫れ物が出来てつぶれたぐらいの物かも知れません。

神様もその時は痛いか痒いのです。

そのつぶれた傷を修復しようとする働きがおこるのです。

神様も人間が勝手に山を崩したり川をせき止めたりと言うように天地に勝手に傷を付けておりますから、元の姿に戻そうとして修復をするのです。

それは天地は生きている生命体だからであります。

そういう天地の働きの中に生かされていることに私どもはどれだけお礼を申しているでありましょうか。

そんな事は当たり前であるのに、何でお礼を申さねばならぬのかと、言われるかも知れませんが、この当たり前のことが大切なのであります。

それが当たり前ではないのであります。

これがおかげで出来ているという事なのであります。

信心をしていて、いろんな難儀が重なってくると、「信心をしているのになんでこんな事ばかりが私の処ばかりに起こるのでしょうか。神様は何の恨みがあるのでしょうか。」と言ってくる人もおりますが、教祖様も「信心しているから、病気もせず問題難儀もおこらないとはかぎらない」とみ教え下されてあります通りに、生きているという事があらゆる問題、難儀、病気があるという事であります。

それを信心によって信心辛抱させてもらったり、信心して時節を待たせてもらったり、信心させてもらう事により心が改まり、生き方を反省して道理にあった生き方が出来るようになり、気付いてみればおかげになっていたと言うことになるのであります。

私どもはとかく自分の思い通りになるのがおかげであって、思い通りにならなければお

かげでないかのように思っておりますが、ここが問題なのです。

昔は信心すると言えばそれは、人間の適わないことを成就するための一つの道具位に考え道理もへったくれもない、自分の思い願いが通りさえすればおかげと言うておりますね。

ですから自分の思いや願いが通らなければ、「信心してもなんちゃおかげはない、神様もえいかげんなものじゃ。」と言い、「信心も止めようか。」と思うなどと言うて、籤（くじ）をくる者がありますが、まるで神様に信心してやっちゃりおるぐらいに思っておりますが、神様にそんなに恩を着せられるぐらいに、信心がなされている者はおりません。

信心はしてやってやるものではなく、信心はおかげでさせてもらうのであります。

信心をさせてもらうところには、何も条件はないのです。

只一筋に一心に神様を信じて祈らせてもらうのであります。

このお道の信心は、生神金光大神御取次の道と言われておりますように、御取次抜きにしての信心は考えられないという事であります。

おかげが無いと言う人は、教会に度々参拝して御取次を頂いてと言うのではなく、自分の家で勝手に拝んで先に申しましたように、自分の不足や不満を神様に、どうぞどうぞおかげが頂けますようにと願っておるばかりです。

教祖様は、「忙しいときに無理に参ってこいとは言わぬが、度々教会に参って話を聞いた者と聞かぬ者とでは、おかげが違うとも教えられておりますように、教会に度々参って来る人はそれだけみ教えやお話を聞いているので、当然信心が本筋に近いものになりやすくおかげも受けやすくなるのです。

教祖様は、「話を聞いて帰っても神の言う通りにする者は少ない。帰ってから自分の良いようにするのでおかげはなし。」とも教

えられております。
それで、「おかげは一つもない。」と不足を言うのですから、神様はたまったものではありません。
天地の親神様はちゃんと我々人間の心をご存じで、「氏子は医師に掛かって病気が治らなくて死んでも医者にはお世話になったと申して、せめてもと菓子折りでも添えてまでお礼を申すが、神に頼んで病気がなおらなんだら、おかげは無かったと不平不足をいって、お礼に来る者は少ない。」と人間の心を見抜いていらっしゃいます。
だからといって、不平不足を言ってよいと言うのではありません。
それは天地の道理に添わないのではないか、とおっしゃっているのです。
天地のお世話になって生かされて生きているのに、病気が治った治らなかったというてお礼をするとかしないとかという問題ではないのです。
たとえ病気が治らなくても、今日までの生かされて生きらせてもろうたお礼を申すのが筋というものです。
これが信心なのです。
教祖様は「生きておかげの者もあり、死んでおかげの者もある。」とおっしゃって、「人間には、善し悪しは分からぬ。」とおっしゃっておられます。
信心しておかげを受けるも落とすも、和賀心一つである。
「おかげは天地の恩を忘れないことである。」
恩を忘れないと申しますと誠に古臭いとおっしゃるかも知れませんが、今なぜ昔のようにおかげが頂きにくいのか申しますと、恩などという古臭いことを言うと言うて嫌います。
これがおかげを受けれない原因となっているのではないでしょうか。
天地の恩・親の恩・物の恩・水の恩・などなど、でありますから、先に申しましたように前の金光様が「世話になるすべての礼

をいふこころ」とお諭しになられたのだと思います。

ただ今申しましたように、あらゆるものにお世話になっておる事の恩を知ることこそが、信心であり、天地の道理なのであります。

このことを忘れてはどんなに拝んでもおかげは受けられません。

（二〇〇七年【平成十九年】十一月十五日大祭講話原稿）

（▲教会にて大祭後挨拶）

○教会だより二〇一六年四月号より

『難はみかげ』

只今、親先生の御斎主のもとに美しく盛大に教祖大祭がお仕えになられ誠に有難い事でお目出とうございます。

御大祭の後の教話と云う事で、私のような不徳のものが、こちらの親先生より御指名下され、不徳もかえりみませず、お引き受けいたしてまいったのでございます。

こちらの先代親先生のお元気でご用下されておられました時は、度々道中などで御教導を頂きお育てを頂いたりいたしまして、今日ここでお話しをしろと今の親先生が私に御指名下されたのは、先代が「高岡どれだけ育ったかみてやる。窪川のお広前で話しもしてみい。」と云われたのではないかと思ったりもいたしております。

私が先代とお会いして御教導を受け賜ったところから感じますのに先代は、いつもお

礼を申せと云うお言葉が多かったように思います。

お礼の信心と申しますか。

お話しもあまり、ご信者さんがこんなおかげを頂いたと云うおかげ話しと云うよりも、いつも金光大神の道を話されておられたように思います。

信心をするとこんなおかげが受けられたと云うような話しは少なかったのではないかと思うのです。

御大祭の後の教話と云うのは大変難しいもので、御大祭を生かすか殺すかが教話にかかっておりまして責任を感じるわけです。

このお教会のご信者の皆さんが常日頃どのようなご信心をなされ、どのようにご信心をお進めになっておられるかと云う事がわかりませんので、どのようなお話しをさせて頂く事が皆さんの今後の信心生活の上にお役に立つかと思いますと本当に難しいですね。

落語家や漫才師が話したり、歌手が歌ったりするのは、落語や漫才は人を笑わせば成功ですし、歌手ならファンのよろこぶ歌を歌えばよいわけですが、お道の教師がお話しするのは、ばかな事をいって笑わしても助かりにはならず、別にファンがあって、何をしゃべっても喜ばれると云う事にはいかないのです。

第一に話を聞いて助かるという事が大切ですし、話の内容がよくても、皆さんが退屈するような話しですと、内容はよいかしらんが、まことに退屈な話しをすると云う事になります。

楽しい話しだけですとあれば、何だと云う事になるわけです。

助かる話しであり、退屈せず、楽しく聞ける話しと云う事でなければならないと云う事になるわけですから信心の話しは難しいわけです。

まず皆さんにお断り申し上げておきますが、私の話しは高岡の信者から話しが難しいとよく云われます。

それはおかげ話しをあまり致しませんので、それであろうと思いますが、できるだけわかりやすくとは思っておりますが、おかげの受けとめ方と申しますか、見かたと申しますか、そこのあたりでも大分差があると思います。

世間一般では、おかげを神様から頂くと云う時のおかげは、奇跡的な現象をおかげ頂いたと云うふうに申します。

私がおかげを頂いていきたいところは、日常生活の中に、病気の中に、経済の苦しい中に、人間関係の中に、問題の中におかげを頂いていることを、おかげとわからせて頂き、お礼の申せる信心であります。

人がみたとき、どうしてあれがおかげ頂いたと思える中に、おかげを感じるお礼の申せる信心になりたいと私は常に思っております。

奇跡的なおかげとか、すべて都合よく生活ができることを喜んだり、お礼を申すことは、それは別に信心をしなくても、それなら誰でも喜んだり、お礼を申したりできるわけです。

喜べないお礼の申せないところに喜びを感じ、お礼を申せると云う事が信心の世界の助かりだと私は思うわけです。

私は教会の子弟ではございませんから、信者の当時は奇跡的なものがおかげだと思って過ごしたわけです。

教師ということになりましても長らくそのように思っておりました。

しかし、そうそう奇跡的なおかげと云うものはあるわけではなく、信心をさせて頂く中に先に申しました、人が喜べないことを喜ぶお礼が申せるということが、信心の世界だと云う事に気づかされたわけです。

教会の先生が一般社会の人と同じ思いや考えを持ったといたしますと、とても勤まる御用ではないわけですね。

あいつは気に入らない奴だと云って腹を立てたり、愚痴を申すわけにはいきません。

むしゃくしゃするからと云うてお酒を朝から飲んで気を晴らす事もできないのです。

その上に着る物でも家庭用品でも、むやみに買い求めたり、月賦で買うと云う事も許されないわけです。

ではその中にあってどう生きて行くかと云う事が問題となってまいります。

その中に喜びを見つけ楽しく明るく生き生きとした生活を求めて行くと云う時に、喜べるはずのないところに喜びを見つけ出して行く、お礼の申せる生き方をさせて頂く、これしかないわけです。

人間欲なことを申せばきりはございません。

今の生活を喜び、そこからより一層よい生き方を生み出して行くことが人間の生きる道だと思うわけです。

それを金光大神の信心に求めてまいるのが金光教の信心ではないでしょうか。

三代金光様は「難はみかげ」と今日の講題にさせて頂いております御教えをなされておられます。

難は難ではないか、なんで難がおかげかと反発したい思いの方もおられると思います。

たしかに難は難に間違いないのです。

それは信心をせねば難は難なのです。

いや私は信心しているが難は難だと申される方は、長年お参りはいたしたが、信心は抜けていると云う証明なのであって、なにものでもないわけです。

お参りを毎日されても御取次を願っても、神様のご神意にかなわぬ生き方、金光大神様の思し召しにそう生き方をせずに、私は私の我が道を行くと云うたのでは毎日、日参拝されたと云う事で金光大神様の御信心にはならないわけです。

ここのお広前にはどうか知り

ませんが高岡には毎日、日参はされているが、神様の思し召しにそうことはしないと云う人が、お取次を頂くと云う事をまるで先生を御祈祷師ぐらいに思って、一切合切を先生が引き受けてくれるぐらいに思っている。

まるでお取次と云うものを今日までそのように思しめるところもあったのも事実ですが、本来お取次と云うものは、先生を通して神様の思し召しをわからせて頂くと云う事なのです。

思し召しを頂いて、頂いた本人がそれを実行して行く事にあるわけで、神様や先生がして下さると思うところに信心が進まない、いつまでも同じところでうろうろしている信心になるわけです。

信心ですから人にしてもらうわけに行かぬところがあるわけです。

先生や神様に願って自分は何もしないと云う事は、例えば、食事をするのに「先生腹が空きましたので、お食事を頂いて下さい。」と云うのと違いはない事になります。

先生が何ぼ食事を頂いても本人の腹は張らぬのと同じと云う事になるわけです。

腹が空けば、本人が食物を頂かねば腹は張りません。

信心もその通り、私の難儀や問題を先生よろしくお願いしますと申しても、先生が替わって生きてあげるわけには行かないのです。

教祖様は道理に合う信心をせねばならぬと申されております。

道理とは自分の難儀は自分で神様の思し召しを頂き、生き方を改めて行くしか助かると云う事はありえません。

難はみかげと云う事は、あらゆる難儀を通して、神様に向い、神様の思し召しにかなう生き方をさせて頂くとき、難が難ではなく、難が生きる土台と申しますか、生き

方をかえる神様に向かう信心の肥になり、真の助かりと云う事が得られるわけです。

今日、教団にあっては、布教と云う事が問題となっておりますが、布教すると云う事は、生活の中に金光大神の道を実現し、その生き方を語り伝えて、人を救うと云う事であります。

目先目先のおかげ信心なら何も金光教の信心でなくてもよいと云う事になるのですが、神様は、子孫まで助かる信心を願っております。

子孫まで残る信心をさせて頂き、永遠に助かって行くためには、目先目先だけのおかげを追っかけていても、今日のように科学万能の時代には、若い人からバカにされてしまうと云う事になるわけです。

科学万能に時代社会の中にも通じる信心、それはこのお道であると思います。

いよいよ若い者に信心を伝える事が大切だと思います。

何でもっと生き生きとならぬのだろうと云う事を申しますが、信心している人が目先だけにこだわる事なく、日常生活の中に喜びを生み出し生き生き、生き甲斐をもって信心を進めて行くと云う事にしかないのです。

人に求めてもどうにもならないわけです。

一人一人が生き生きとした喜びを現す事であると思います。

「おかげは和賀心にあり」これでなければならぬと思います。

（窪川教会大祭講話原稿）

平成二〇一二年四月十五日故野村頴璋美志道次秀貫歩大人一年祭偲び草

『おかげの中でのこと』

（▲高知上町教会大祭にて）

教祖の神の御教え、

『お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげである。

人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。

人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。』

『神は、体の毒を日に日に大便小便で取ってくださる。』

『自分の信心が足りないためにおかげを受けられないのを、神のおかげがないように思っている。

神はこれが情けなくてならない。』

『わが身はわが自由にならないものである。』

『神のおかげで生まれてきた人間であるから、死ぬのも神のおかげでなくて死ねるものか。

そうであるから、生まれたのがめでたいなら、死んで神になるのは、なおのことめでたいではないか。

死ぬのがつらいと言うのは、まだ、死ぬのをいとわないだけの安心ができていないからである。

信心して、早く安心のおか

げを受けておかなければならない。
神のお計らいでは、いついくかも知れないのに、その際のうろたえ信心では間に合わない。
平生から、まさかの折にうろたえないだけの信心をしておかなければならない。』
『信心する者が、喜ばない、つらい顔をして日を過ごしてはならない。
天地の親神を信心するのであるから、天地のような広い心にならなければならない。』
『神を使って、神に使われることを知らない。』
『悪心を持つ者は必ず、末にその報いが来る。
すなわち、天理（天地の道理）のおさえを受ける。
それは、今の裁判所の法律のごとくである。』
『教祖は、ある時のご栽伝に、神の上に天理（天地の道理）を教えられたり。
「神は親子であるから氏子のことは許してやるが、天理（天地の道理）が許さぬ時は、どうする」
と教えらる。
また、ある時は、
「天理が許さぬ時は、神もしかたがないぞ」
と教えたまいしあり。』
ただ今は教会長先生のご祭主のもとに、天地金乃神大祭を美しくお仕えになり誠に有り難いことであります。
私もおかげを受けまして、二十歳の時に死ぬ処を、金光教に御縁を蒙り医師から三か月か半年の命しか持つまいと宣告の中に須崎教会の先代親先生のお取次ぎご祈念を賜り、おかげを受けて腎臓病のおかげを頂いたのであります。
その上にこうして、お道のご用にもお取り立て下さり、おかげを頂いて、六十二歳の今日までこうして生かされておりますことは、誠に勿体ないことだと最近しみじみと思うのであります。
前の教主金光様が、「何事もおかげの中での事でありますから、おかげにならぬことはありませ

ん」と言うようなお言葉がございますが、つくづくそうだなあと思います、教祖様は「お照らしなさるのもおかげ、雨が降るのもおかげ、おかげの中に生かされている。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである」とみ教え下されてありますように、本当に考えてみればその通りであります。

しかし私どもはおかげを蒙ると、病気が全快するとか、貧乏が金持ちになるとか、人間関係なら、相手が自分に合わせてくれるとか、と言うように、何でも自分の思い通りになることをおかげを頂いたと申すところがございます。

しかし、それでは病気が治らなければおかげではないと言うことになりますね。

また貧乏も金持ちにならねばおかげでないことになります。

おかげとは、そんなに狭いものでしょうか。

金光教に関してはどうも違うように感じられます。

教祖様は、七墓築かされるようなことになっても、我々凡人のように、神様をお恨みにはならなかった、神様のからにもなさらなかった、只一筋に自分の至らなさを詫び、人間の尽くせる限界まで実意をこめられても、これですんだとは思いませんと、どまでも人間の不行届きをお詫びなされました。

その行き届いた心を天地金乃神様が、お喜びになられ、「戌の年は、神の言うとおりにしてくれ、そのうえに神と用いてくれ、神も喜び。」と教祖様をお称えに成されたのであります。

そこで思いますのは、私どもはどうでありましょうか。

人頼みの信心でもこれ程信心しているのにと、まるで神様のためにでも信心してあげているかのように申して、おかげが無いと愚痴を申します、自分中心の考え方や生き方をなさる方は、おかげを蒙りましても、おかげとよう受けられない方がございます。

こんな方を神様が御覧になって難儀な氏子と申されるのだと思いますね、口を開けば愚痴ばかりなんですが、お礼を申さねばなりませんと申しますと、大抵お礼を申しているのにこれ以上何をどんなにお礼を言うのですかと言われたり致しますね、先程申しましたように、教祖様は、どこまでも「これで済んだとは思いません。」と言う心ですね、私どもに求められるものはこの心これで済んだとは思いませんというひたむきな謙虚な心であろと思います。

私のことを少し話させて頂きます。

四代金光様は「何事もおかげの中でのことでありますから、おかげはうけられます」というようなお言葉がございますが、私は二十歳の時に腎臓病で死ぬるところを、お道に御縁を頂いて親先生の厚き御取次御祈念を頂いて助けられて、六十二歳の今日までこうして生かされて生きておりますことは、有り難く勿体ないことだとつくづく思います。

その上にお役に立つような御用も出来ておりませぬのに、道の御用にもお使い頂いておりますことは、本当に勿体ない限りでございます。

もし二十歳の時に今のように腎不全でありましたら、まだその当時には今のように人工透析という治療がございませんから、死ぬところを一歩手前でおかげを蒙らせて頂いて、止めていて下さったのではないかと思うのですね、その間には献血も三十回と言う表彰を頂く程でございました。

そして平成五年頃に急に体が痩せてくるし、なんともしんどくて大祭時に装束のカバンを下げて各教会に行かせてもらうのに、途中で少なくても一、二回はカバンを置いて休まなくては、一気に歩くことができなくなり、ある時ご信者の方が私に、

「先生この頃大変お痩せになられたように見受けられますが、病院に行って診てもらってますか。」

と言うので、

「診てはもらってないけれども、行てもどうということはありますまい。」
と言っていたのですが、その方が、
「どうぞ私たちのために一度病院に行って診察を受けて下さい。」
と言われ、そうだあまりご信者さんにまでご心配をかけたのでは申し訳がないと思い、病院に行き診察を受けましたところ、医師より、
「こんな血圧は診たことがない、最高血圧は血圧計であまりにも高すぎて計れない、最低血圧が普通の血圧の上より高い。」
と言われ、その上に、

「腎臓が腎不全を起こしている、即入院して下さい。」
と言われ、入院する積りで来てないので、
「一度帰ってから。」
と申しますと、医師より、
「返すわけにはゆきません。途中で倒れでもしたら私の責任になりますから。」
と強く言われたのでありますが、
「どうしても一度帰ってから出直します。」
と申して帰らせて頂き支度をして入院させて頂いたのでございますが、それからは度々入退院を繰り返している内に、
「退院前に胃の検査をしてから帰っては。」
との院長先生の薦めもあり、胃カメラを入れての検査で医師より、
「検査の結果、胃上部に異質細胞が見つかったので、出来れば早く手術をして除けた方が良い。」
とのことで退院どころではなく胃の手術ということになりました。
手術をして下さる主治医の先生は徳島県から来られていた外科の先生で、私が金光教の教会人であることが分かると、先生は、
「僕のところも金光教です。」
とおっしゃり親しくまたいろいろと丁寧に手術の段取りなども教えてくださり、内科の先生は、
「人工透析はまだ早い。」

と言っていたのですが、外科の主治医の先生が、

「手術の前に透析を初めてもらって血液をきれいにしなければ、術後の傷が直りにくいので透析を始めますから。」

と申して透析をするためのシャントという血管の手術を先にして、透析を始めて十日ぐらいしてから胃の手術となったのでございます。

手術で取り除けた異質細胞はガンの初期で、

「すべて取り除けることができたので安心して下さい。」

といわれましたが手術後にブドウ球菌が入り、特別隔離室に入れられ一か月くらい隔離されたのでございますが、やっと菌も無くなり普通病棟に移り、

「次に大腸の検査もしておきましょう。」

と言う事になり大腸の透視の検査を先ず受けましたところ、

「大腸にポリープが見付かったので、大腸の内視鏡で手術をして取り除けましょう。」

ということになりましたが、私の腸は直腸より奥が人より長くその上に縫れたようになっていて、

「そこまで入らない。」

と言われ取らずに退院となり、

「近森病院に、高岡出身で腕の立つ内科の先生がおられるから、紹介するので行きなさい。」

ということになり近森病院に行き大腸カメラを入れ先生が、

「こんな難しいややこしい腸は始めてだった。」

といわれ二つのポリープを取り除けるのに、なんと四時間近くもかかりやっと終わったのであります。

大腸のポリープは悪性ではないから安心して下さいとのことでおかげを蒙ったのでございます。

それからは毎年一度は検査を受けておりますけれどもおかげ様でガンの再発もなくおかげを頂いております。

そして今は週に三回月水金と透析を受けておりますが、おかげでこうして元気に普段はおらせて頂いております。

透析という治療もこれを全額自己負担ということでありましたら、腎不全患者の九割りの人は死んでいるのではないでしょうか。

億単位のお金があっても何年も持ちませんからね、今はおかげさまでこうして何のお役にも立てないような私でも、こうして透析を受けさせて頂いて生かしてもらっております。

勿体ないことでございます。

皆様は天地のお恵みを頂いて生かされて生きておりますが、私は天地のお恵みの他に人工透析という高度な医療器と、透析室の工学医療技師、看護師などさまざまなスタッフの方々に支えられつつ生かされているのであります。

こうして透析を受けなければ生きられない私どもは、一週間もそのままにすれば、いやでも死に至るのでございます。

透析を受けながらでも、一つ食べ方が悪かったり飲み物を一つ欲を出しますと、場合によっては心臓が停止したり呼吸困難に陥ったりするのです。

一つ間違えば死ということになるのです。

その中でこうして元気におらせてもらっているという事はおかげなのであります。

前教主金光様は「世話になるすべてに礼をいふこころ」とみ教えになっておりますが、考えてみますと本当に人間はあらゆる物に人に、世話にならずに生きられるということは一つもないのであります。

人間同志でございますと私どもは「あの人は好きこの人は嫌い」と言う事をよく言いますが、好きな人嫌いな人がいて人間は成長するのですね、好きな人ばかりでしたら努力もいりませんから成長するということはなくなるのです。

嫌いな人がいるから、この人とどうやって付き合って行けば、楽しく生きて生けるのだろうと考え努力して良い生き方が生まれてくるのです。

ここに、信心の世界が生まれ

てくるのです。
人間の考えではどんなに優れた哲学者も倫理学者も、行き詰まるこれ以上人間としてどうしようもないという行き詰まりが生まれてくるのです。
しかし信心の世界にはどんなになっても行き詰まりということはないのです。
どんなになってもあきらめたり悲観したりすることなく信心生活を求めていれば、先に申しましたように「おかげの中でのことでありますから、おかげになります。」といわれたように、信心辛抱して取り組めば開かれて参ります。
これが信心の世界なのであります。
この道ではどんな難儀なことでも逃げたり諦めたりすることなく、ひたすらに信心辛抱させてもらう事により、どんな困難なところにもかならず道は開かれてくるのです。
私は皆さんご承知の通り週三回の透析を受けておりますが、こうして間の日は腎不全の体と言う事を忘れるほど元気でおらせて貰っております。
そして透析を受けるのには水分を制限されるのですが、私はおかげさまで胃の手術をしているところから、どんな御馳走でも人並みには頂け無いことがおかげなのであります。
食べ過ぎ飲み過ぎがあまりありませんからね透析が楽なのです。
私の両隣のベッドの方は食べ過ぎ飲み過ぎをされて大変透折中に難儀をなされておられます。
そうしてみると私の場合は人並みに頂けないのがおかげということになるのですね。
ここで大切なことは、今の自分のそのままの姿をお礼を申し、今の姿がすでにおかげを受けているという事であります。
天地の中のあらゆるものにお世話になって生かされて生きております。
人間関係でも好き嫌いがございますけれども、嫌いだから付き

合わないとか、好きだから付き合うと言うのでしたら、それは違うと言うことに最近ようやく気が付かされております。

この道の信心はどこまで神の氏子として、嫌いな人や性格の合わない人を好きになり合わせて行くか、そこに信心の価値が現されて来るのだと思います。

あの人は好き、この人は嫌いと言うのであれば、なにも信心することはいらないのです。

私は今日まで随分人の好き嫌いをして参りました、その心が邪魔をして少しも修行ができなかっということに気付かせられております。

自分の意に沿わないと腹を立てるという生き方をしていたのです。

信心して道を立てるとか、親を頂くということは、自分が出るうちは、本当に道も立たず、親も頂けないのです。

問題が起こるのは、自分が自分を分かってないからであるということに気付かなければ信心にはならないのです。

自分の何に気が付かねばならないかと申しますと、何にもできない、何にも力のない、何にも分かってない、自分であるということに気付かせてもらうという事であります。

ここにとことん気が付くと素直になれるのですね、分からないのですから人に聞かねばなりません。

力がないのですか人に力を借らねばなりません。

親の言う事が聞けないということは、自分は分かっておる知っておると思うから聞けないのですね、今は親よりは、どうしても、学問てきには、親よりも理屈では優れております。

しかし生きるという事は、理屈ではないのですね、例えば、女の人が子育てをするのに、大学を卒業しているから、立派に育てられるというものではない、小児科の先生よりも、時には無学でも実際の体験を通して培われた母親の意見が正しい時の方が多いのです。

そのように人生は、数学や科学とは違い理屈通りにはいかないのが人生ですね、信心もこれと同じ様に理屈では分からないところがあるのです。

実際に生活の中で実践してみて始めて分かるものなのです。

信心の難しいところは何かと申しますと、本を読んだり話を聞いたり致しますと、頭ではある程度信心の理屈が分かります。

しかし頭で分かったから信心も分かったかというと、そうとはいかないのが信心なのですね、信心が本当に分かったと言う事は、信心の生き方が身に付いているということでなければならないのです。

例えば、冗談一つ言っても人の心に傷つく言い方と、なごます言い方とあると思うのです。

信心させてもらうものは、なごます言い方でなければなりませんね、これが身に付くという事が信心なのであります。

私はよく夫婦のなかで、家内が嫌な思いをするような言い方をすることがしばしばあります、これは信心でないのです。

こういう言い方を致しますと直ぐに分かるのですね、自分の心が何となく嫌な感じが出てきますから、これがおかげの中でありますから、和賀心の神様が気付かして下されているのであります。

これを改めて行くのが信心の稽古なのであります。

四代金光様がある時、参拝された方がお詫びを申されたところ、金光様が「言葉でお詫びをされずとも、心から改まられたらそれで結構であります」と言われたと聞いたことがございます。

神様から気付かされますと、その時には御免と言って誤ったり致しますが、本当に誤っておりませんので、改まるという事ができておりませんから、また、同じ事を繰り返しするのであります。

これでは何十年信心いたしましても同じことだということになります。

いや何十年も神様は拝みま

したが、信心はしなかったということになるのです。

これでも神様はおかげを下されております。

勿体ない事であります。

共々に信心をさせて頂いて、おかげを蒙らせて頂きましょう。

【平成十五年（二〇〇三年四月二十日）高知上町教会天地金乃神大祭『最後の大祭教話』】

・あとがき

土佐高岡教会二代教会長、野村頴璋師の五年祭ということにて、偲び草として一生を振り返り、人となりを知って頂きたく良いところ悪いところも様々な記録を元に書かせて頂いたのでありますが、頴璋師本人が書かれていたもの以外にも、登茂子師にその当時のことを聞かせて頂いたこと、他の先生方より聞き及んだこと、私が直接聞かせて頂いたことなど、中には間違って聞いていることもあるかも知れませんが、そのことは頴璋師の御霊神様にお詫びを申し上げ、お許しを頂いたこととさせて頂きますが、私（清治）から見て裏表があるという訳ではありませんが頴璋師は外で御用される姿と、教会で過ごされる姿とでは違いがあるように感じ、他から見られた姿と、家族から見る姿とでは多少の違いのあることはご了承下されば有り難く存じます。

また出会われた人々によって受けられた印象など違いはあることと存じますが、その中にあって頴璋師の良いところを偲んで下さり、おかげを蒙られた方々は御礼を申して下されば幸いに存じます。

有り難うございました。

平成二十八年九月九日

金光教土佐高岡教会長

野村清治

金光教土佐高岡教会二代教会長

・野村頴璋師（故野村頴璋美志道次秀貫歩大人之霊神）略歴

昭和十五年十一月十六日　誕生
昭和三十四年　御本部立教百年に初参拝
昭和三十五年　大病（腎臓病・高血圧）
昭和三十六年十一月　須崎教会にて入信
昭和三十七年三月二十四日　金光教教徒になられる
昭和三十八年五月　金光教学院専科入学
昭和三十九年四月十五日　金光教学院専科卒業
昭和三十九年四月二十六日　土佐高岡教会副教会長の野村登茂子師と結婚式
昭和三十九年六月十日　金光教教師拝命
昭和三十九年七月三日　土佐高岡教会教会長の野村トヨ師と養子縁組
昭和三十九年七月三日　野村登茂子師との婚姻届を提出される
昭和三十九年九月一日　土佐高岡教会副教会長になられる
昭和四十年二月二十八日　長女(真子)誕生

昭和四十年三月三十日	長女（真子）御帰幽
昭和四十年八月二十五日	長男（真一）流産
昭和四十一年八月六日	二男（真二）誕生
昭和四十六年八月十七日	三男（清治）誕生
昭和四十七年三月五日	土佐高岡教会御造営
昭和四十七年十月六日	野村トヨ師　御帰幽
昭和四十七年十一月一日	土佐高岡教会長拝命
昭和五十九年前後	教会屋根から落下し腰を強打（滑り症）
平成五年頃	大病（腎不全・胃ガン・大腸ポリープ）
平成八年九月二十三日	土佐高岡教会布教五十年記念大祭
平成十年八月七日	宇佐布教所閉所
平成十六年六月十三日	教師四十年の褒賞を賜る
平成十八年九月二十三日	土佐高岡教会布教六十年記念大祭
平成二十年十二月四日	大病（肺炎・眼底出血・脳梗塞）
平成二十一年一月十四日	土佐高岡教会長辞任
平成二十三年二月十一日	大病（敗血症・腹部血管瘤）
平成二十三年四月五日	御帰幽（敗血症にて満七十歳四ヶ月二十日）

編纂　二〇一六年（平成二十八年）九月九日
発行　二〇一六年（平成二十八年）九月二十三日

編纂・著作者・発行者　金光教土佐高岡教会長　野村清治

金光教土佐高岡教会蔵書